

選考委員特別賞 最相葉月賞



私は生きる選択をした ついじめに悩む小学生へ

佐世保市立清水小学校 六年

石本 光歌子

私は「死」を選択し実行したことがある。

だが、あと少しのところで、小さかつた私と母に助けられた。

福岡での生活が無かつたら、死んでいた。

死に對して恐怖など無かつた。死ねば誰にも責められない。もう虐められなくてすむ。そう考えていた。

虐めに心を支配され死の淵へ追い込まれていたのだ。
実行するまでに、何度も頭の中でシミュレーションを行った。

あれから約一年が経つた。

私は今も虐めから立ち直るために戦っている。将来の

した。耐えがたい虐め攻撃を受けるたびシミュレーションをした。

何回したのか覚えていない。

人生約十一年のうち、虐め経験は約五年。人生の約半分を虐めに悩み苦しんだ。数日欠席しても登校すると始まる。終わらない虐めの恐怖に支配され、生きる気力を奪われた。

そんな状況を打破する方法が、死の選択だったのだ。

その死から救い出したのは、母との楽しい記憶だった。目を閉じていたから何も見えないはずなのに、目の前に母と小さいころの私がゲラゲラと笑い私を見ていた。

皮膚表面の感覺が無くなっているのに、福岡での生活を思い出していた。もう少しで死ねるというところで、福岡に住んでいた時の楽しかった生活を思い出したのだ。

◀子どもノンフィクション文学賞 ◻

自分像を思い描き、自分の人生を自分で考え自分で決める。そう意識するようになった。

一年という時間は、大人は短く感じるだろうが、まだ十一歳という小学生の私は長く辛い。

まだ、虐めから解放されたような感覚が無い。学校から距離と時間を置いても、虐められていた時の辛い感覚が残っている。

耳の奥に残る彼らの声が生々しい。

虐め記憶は何一つ消えていない。風化させることもできない。忘れようと努力もした。

だが、虐めたことさえも忘れた彼らを見かけただけで、説明しようのない憎しみと恐怖が入り混じった、複雑な感情が身体の奥底からドクドクドクッと湧き上がってしまうのだ。

長期欠席を経て不登校になつた。

学校復帰するつもりが無い。

転校も引越しもしない。

理由は、学校に問題があるからだ。安全確保ができない学校へ行くことができない。どこの学校も同じ。ただそれだけだ。

死を選択させてしまう虐めが、いじめとして認めてもらえない。

「いじめ防止対策推進法」における「いじめの定義」さえも通用しない。

いじめ→イジメ→苛め→虐め

虐めは触法行為だということも通用しない。

人が子どもを虐めると「虐待」になるということも通用しない。

以前、長崎県内では大きな事件があつた。そして、いじめによる自死もあつた。それでも、いじめ認知をしない。そういう土地柄と人間性なのだと諦めるしかない。

多勢に無勢なのだ。

去年「日本死ね」という言葉が話題になつたが、私の場合は「学校死ね」だった。「学校なんか消えろ」と本気で考えた。しかし、学校が消えても、いじめは無くな

らない。人間が複数人集まるごとに必ずいじめが発生する。

動物のマウンティング行動に似ている。

どこにいても、いじめがあるのだ。

いじめる者たちは、いじめを止めることが出来ない。

大人たちは、いじめを正当化し道徳心や倫理観が低下する。

いじめが発展し激化すると虐めになる。虐めになると命の危険が迫るが、誰も虐めを虐めとして捉えられない。

虐めは、いじめが習慣化されたものだ。その悪習慣を周りの大人たちが矯正するのは難しい。虐める者は虐める。虐める者は、虐めを黙認する親の子ども。

虐め攻撃能力の高い子どもたちなのだ。

このように虐める者たちを考察した結果、虐め解決方法を探すより、自分の希望を探した方が良いのではない

かと気付いた。

虐め解決方法は、どこにも無い。あるのは理想論。絵に描いた餅だ。あれやこれやと思い悩んでも解決策は無い。これが現実。

学校は偽装された正義で作られている。

世の中のルールもおかしいことが多い。

現実世界は理不尽で作られている。
と考えられるようになって、いじめ解決方法を見つけることを諦めた。虐めを認めさせるのを諦めた。

諦めることは、負けたという事ではない。報復するための一時撤退だ。自分に力をつけ、彼らに報復する。その時まで「一時的に諦める」ということなのだ。

報復という言葉は好きではない。だが、復讐という言葉よりも少しマシだ。

私は彼らに報復するため、日々勉強している。学校の学習内容だけではない。日常にあふれている情報から知識を身に付け、思考力と文筆力を鍛えている。

報復方法は、人それぞれ違うだろう。彼らと同じ方法で報復すれば、彼らと同じ人間になる。虐められた者にもプライドがある。

私は彼らと同じ人間ではない。近い未来の自分のため

第9回
△子どもノフィクション文学賞〇

でもあるが、懸命に努力を続いている。

いつか、彼らの手が届かない世界へ行き、彼らの心を嫉妬に支配されるよう仕向ける。嫉妬心に狂えば、そこから抜け出すのは難しい。闇の中に飲み込まれるといいのだ。

私の報復方法は、彼らが得ることのできない、成功や幸せを手にすることだ。

彼らは彼らのままでいい。反省も更生などもせず、あのまま大人になって欲しい。差が拡がれば拡がるほど、嫉妬に狂い悔しがる。

だが、報復する頃には報復計画自体を忘れているかもしない。数年後の私は人として、今以上に成長できているはずだから。

この一年、本当に大変だった。地獄から這い上がり、将来の自分像がボンヤリではあるものの見えるようになつた。

集団虐めがあつた十月から翌年の二月。

地獄だつた。何もかもが恐怖だ。

家中は安全だつたが、電話が恐かつた。学校からの電話は、元担任たちの心理的虐待を思い出し、布団の中に逃げ込んでいた。

外出するのも怖い。外出した時、同じ学校の子に見つかると、顔を覗き込まれた。避けると追いかけてくる。虐めを思い出し、吐き気と息苦しさに襲われた。

外で騒ぐ小学生の声が聞こえただけで、集団で囲まれた時のこと思い出した。生きていっても仕方がないと「死」を考えた。

希望も何も無い。私が生まれた意味や、生きている意味が、わからなくなつていた。

「なんで私を産んだの！あんたが産んだとやけん。殺してよ！」

母に怒りをぶつけ、叫んだこともあつた。

「私が産んだとやけん。私が生かす。なんか文句あつとね。」

母は、いつも私の問い合わせに答えた。

ごまかし無し。本音、本心、本気だ。

私を真正面から受け止める。逃げない。

私がここまで立ち直れたのは、この母のおかげだ。見た目こそ悪いが、親としては最高点だ。わかっている。

わかつてているが、素直に感謝の言葉が言えない。

まだ、完全に立ち直っていらないから。

三月。

大学の合格発表のニュースを見て、今まで大学へ進学できないと不安になつた。

合格発表で嬉し涙を流す人を見て、別の意味で涙が流れた。学校へ行くことができない自分に情けなく、悔しくて悲しかつた。

虐めを認めない彼らを恨んだ。受験勉強に力を入れる彼らを想像すると、憎しみしかなかつた。

難関中学へ進学し、理系大学進学を目指したい。とう目標を持っていたから、目標を奪つた彼らを憎み恨ん

だ。

母は私の気持ちに気付いていた。

ある日、地元の私立中学へ進学する方法を提案してきたのだ。

「〇〇中学に行かんね。そこで英語をマスターして〇〇大学に挑戦したら。」

「そこは理系進学率が低い。」

「また、そがんこと言う。あんた頭の固かね。ゴツチゴチの石頭やね。」

「なんでそがんこと言うと。」

「バカつていうことたい。何が悪かと。」

「ママがバカ。私の気持ちなんか考えんでいろいろ言つて。バカはママやけんね。」

多分、どこの家庭でも起こりうる、母娘の口論になつた。内容のレベルが低いが、ズケズケ言う母と反抗期娘の口喧嘩だ。

この日は母が勝つた。何も言い返すことができなかつた。

第9回
△子どもノフィクション文学賞○

「あんたつてホントにバカ。○○大学は、どこの中高に進学しても受験できるとよ。」

高校に行かんでも、高校認定試験に合格すれば大学受験できるしさあ。

文系が得意な高校からでも、理系に挑戦できるとよ。」

「あんた次第。よう考えんね。」

中学→高校は、大学へ行く通過点だということだ。「難関中学からしか進学できない」という考えを捨てろといふことだった。

母の提案に腹が立つたが、ホツとした。方法は、一つだけではないと知ったからだ。

四月。

適応指導教室へ通級することにした。中学受験用の出席日数稼ぎのためだ。

五年生の後期成績は全て斜線、出席日数一桁だ。六年

生の前期も同様なら、難関中学を受験しても落とされると考えた。

適応指導教室へ通級しても、授業があるわけではない。自分で勉強する。自学だ。時折、心無い言葉を掛ける先生がいるが、出席日数のためだと自分に言い聞かせ、ガマンしている。六年生前期の成績表が、中学受験用の調査書に記入されるからだ。

調査書を意識するようになつていた。学校で授業を受けていないため、教科成績は斜線のままになる恐れがある。受験先の学校への学力証明がない。入学試験だけでは不利になると考えた。

六年生以上の学力を証明するために、検定などで力バーしようと、勉強を始めた。

まず取りかかったのは、英検と数検の勉強だ。英検三級と数検五→四級所持は標準装備のような世界だ。六月受験に向け、気合を入れ勉強に励んだ。

五月
六月

勉強中心の生活だったが、勉強の合間にピアノ練習と読書でリラックスした。

とが増えた。

小学生が高校生のように集中力を持続させるのは難しい。私の場合は、集中力が途切れる前に勉強から離れている。

ピアノの練習や音楽を聴きながら読書するなど、勉強の合間に好きなことをしている。

勉強四十分と休憩二十分を四セットすることが多いが、調子が悪い時は勉強十五分と休憩十五分になることもある。

調子が悪い時、大きな傷を負った者でも、幸せになれるのだろうかと悩んだ。いじめ報道を見聞きするたび、被害者が私と重なってしまったからだ。

幸せになれるのだろうかと悩んでいた時、高齢の友人から一冊の本を頂いた。

「原子雲の下に生きて」 永井隆氏編集。

原爆から生き残った子どもたちの手記をまとめられた本だ。私は全ての手記を読んだ。

あの状況で、心に傷を負わなかつた人などいない。七

十二年前の心の傷は、どうなつたのだろうかと考えるこ

時々、おそわれる不安に耐えられず、一度だけ友人に尋ねたことがある。

「この手記を書いた人たちは、幸せにならしたと？」不安だった。この質問に私自身を重ねていたからだ。だが、友人は人生の大先輩。私が考えていることなど、お見通しだったのだろう。

「人それぞれよ。」

そう、私が幸せになれるかどうかは、自分次第なのだと気付かせてくれたのだ。

七月。

検定試験に合格した。

母の教えである「人並み以上になりたいなら人の五倍は努力すること。」を肝に銘じ、努力した結果だ。

勉強の合間を活用して、毎年恒例の理科研究に取り組み始めた。

まず研究計画をたてた。実験用具と材料の確認。実験

▷子どもノンフィクション文学賞 ◇

方法と手順など、効率的に研究を進めるための計画を立てた。

佐世保市では、市内の児童・生徒向けの理科研究コンクールがある。そのコンクールに四年生から挑戦し、二年連続の次点だった。大賞に届きそうで届かない。

結果が全てではないが、目の前にある大賞を一度は取りたいという欲が出てきた。

八月。

地元私立中学の短期英語教室に参加した。

先生方の超明るい声の挨拶に驚いた。

「Hello everyone! Nice to meet you~」

ミュージカルでも始まるのかというくらいの、明るく

リズム感のある声に驚いた。

英語教室の三日間は楽しく、知り合いもできた。休憩時間、先生の超明るい挨拶を真似して遊んだ。学校が楽しかった。

英語教室の参加後、いろいろ考えた。

共学である難関中学に進学した場合、教室に入ることができるだろうか。学校に行くことができるだろうか。

地元私立中学は女子校。男子がない。

男子がない教室は快適だった。荒々しい言葉や暴言に暴力が無かつたからだ。

理系大学の進学率で中学を決めるのは、よくないと思い考へ直した。

いつの間にか、難関中学受験勉強から遠ざかり、理科研究に没頭していた。

九月～十月

六年生の学習内容は完璧だ。

しかし、以前ほど勉強に力が入らなくなっていた。ぽんやりする時間が増えた。

夏休み明けから十月は、虐めが激しくなる時期だからだ。また虐められるのではないかと不安になり頭痛と腹痛が続いた。

最後の集団虐めがあつた日が近づくと、吐き気と息苦

しさに頭痛が辛く寝込んだ。

十月二十六日。

文部科学省の会見で「二〇一六年度いじめ認知件数」の発表があった。その会見を見て腹が立つた。

全国の小・中・高校と特別支援学校のいじめ認知件数32万3808件、前年度より約10万件増え過去最多という発表があつたのだ。少なすぎると思った。文部科学省の会見内容を疑つた。

資料があるはずだと思い、文部科学省のホームページで資料を確認した。

平成二十七年度版の文部科学統計要覧と平成二十八年

度の児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査の資料を調べた。

小学生の学力で計算をした。

いじめ認知件数、32万3808件。

児童・生徒数、1360万5475人。

1年間で約42人に1件のいじめ認知だ。軽微ないじめも含まれている。

約1クラスで1年に1回のいじめ認知。ありえない。

この結果は、いじめを黙認しているのと同じだと残念に感じた。

学校から逃げて良かつたと心底思う。

十一月。

理科研究コンクールの結果が発表された。今年も次点。三年連続だ。

今年は全ての工程に力を入れ、論文形式でまとめて埋めた。その結果が次点なのだ。「報われない」の意味を知った。

私は天才的な考え方を持つていらない。だから努力で埋めようとした。努力したつもりだけだったのか。努力が足りないのか。わからなくなつた。

研究を続けるかどうか考える中、私立中学のオープンスクールへ参加した。

進路相談で理系の先生に相談した。
教師不信の私が、少しだけ勇気を出して相談した。最

第9回
△子どもノンフィクション文学賞〇

初、声が出なくて困った。質問したい内容を書いたノートを差し出した。

①○○大学理系学部へ進学希望しています。

②研究と学業を両立したいです。

③理系志望者へのサポート体制を知りたい。

「英語の勉強してる?」

「英検三級とりました。」

「理系は全部の教科を頑張らんばよ。大丈夫?」

「はい。」

先生方との会話は、学校・教師不信が強い私のもつれた感情を解くきっかけになつた。

「この研究（微生物）面白いもんね。私も微生物の研究してたよ。」

「一人でしたの？頑張ったねー。」

先生たちの言葉がスッと入つてきた。研究の苦労や一人で勉強する大変さを共感してもらえたのだ。

オープンスクールの帰り道、この学校に入学したら何をするかと計画を考えていた。

「ママ、なんかできそうな気がする。」

長い間、溜め込んだ毒々しい何かが、一気に放出されたような感じだ。

母は「そうねーよかつたねー」と笑つた。

この中学に合格したら、六年かけて理系進学すると決めた時、清々しい気分だった。

一年前、一步間違えると死んでいた。

絶望したまま死んでいた。

地獄のような日々も苦しかつたが、今は地獄の上に堂々と立ち、前を向いている。

今回、虐め経験を書いたのは同情して欲しいからではない。いじめに悩み苦しむ小学生たちのために書いた。

いじめ～虐めは、一人では解決できない。死にたくない。いじめに悩む小学生たちのためにはならない。いじめ～虐めは、一人ではなく多くの人がいる。それが、少しだけ勇気を出し「いじめのある場所や人から離れて」欲しい。

いじめを

相談するのも

逃げることも

恥ずかしいことではない。

いじめを

親に言うのも

先生に言うのも

ズルいことではない。

いじめは

いじめる者に非がある。

いじめられる者に非は無い。

死ぬ勇気が残っているなら
生きることを考えよう